

ドイツと日本の美術教育の比較～地域的美術教育を通して～

大分県臼杵市立東中学校 教諭 永松 芳恵

キーワード 【地域】 【指導者】 【ネットワーク】

はじめに

私の住んでいる九州大分県臼杵市は、海あり山ありそして国宝臼杵石仏ありで、温暖な気候の大変生活しやすい美しい土地である。戦国大名の大友宗麟は臼杵を『日本のローマに』と大きな夢を臼杵城址に残した。そして、山口県柳井市との般若姫伝説や、臼杵藩の残した仁王座歴史の道もある。さらに「秀吉と利休」「海神丸」の作者、文豪野上弥生子、全日本サッカー協会のシンボルマークをデザインした彫刻家日名子実三を輩出するなど、臼杵市は小さな市であるが文化人や文化財を大切に現代に継承してきた。私はそんな土地で 20 年以上、美術教師と油絵作家を続けてきたことに心から誇りを感じている。

『地域的美術教育をもっと活性化させたい、子どもたちに地域で活躍している芸術家と触れ合わせ、教室の中だけではない広い視野での美術の楽しさを発見して欲しい。』そんな思いで、10 年前より、地域の芸術家を学校に招いてワークショップを行い、7 年前には大分大学の大学院研修で廃校を利用した作品展示やワークショップを企画運営し、現在まで市内外でたくさんのワークショップを実践してきた。そんな毎日を過ごしなが、3 年前から「InSEA 国際美術教育学会」、「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」などに参加できる機会をいただき、自分自身の美術教育に対する視野が広がってきたように感じていた。そして今年度、ドイツ連邦共和国に行き、その土地の美術教育を学ぶことができるという素晴らしい研修を受けられることになり、天にも昇るような最高の気持ちであった。

2 週間の研修を受ける前から、地域発信の美術教育に興味のあった私は、まずその土地でどんな教育が展開されているかということに注目した。そして、時間数や指導者の人数も削減されている条件の厳しい日本の美術教育を、懸命に現場で実践してきた自分にとっては、ドイツの指導者がどんな工夫をして実践しているのか、政府との関係など、質問したいこと、確かめたいことが限りなくあった。

この報告書では、地域的美術教育の広がりや、実践例を元に振り返る。そして、ドイツと日本（地元臼杵市を中心に、記述には『臼杵市』と表現する。）を比較しながら、これからの課題や展望、さらに芸術教育が、全世界で必要性を感じられるようなネットワーク作りの工夫などを考察していきたい。

1. 身近な美術教育と教育制度の現状

「人間は誰でも芸術家であり、自分自身の自由さから、『未来の社会秩序』という『総合芸術作品』内における他者とのさまざまな位置を規定するのを学ぶのである～ヨーゼフ・ボイス」

ドイツの芸術家ヨーゼフ・ボイス（*1）の名言通り、ドイツの首都ベルリンや今やサッカーでおなじみのドルトムント、昔ながらの街の雰囲気大切に保存しようとしているヴィッテンベルク、そして世界遺産が駅の近辺で聳え立つケルンなど街並みそのものや、闊歩している長身の人々を目の当たりにすると何もかもが芸術的に見えた。人は生まれてから、現在まで様々な環境で生活する。誰もが生まれながらに感性を持っている。しかし、生活する環境や受ける教育によって、その感性がより豊かになるか平行線をたどっていくか、人生の大きな分かれ目になる。

ドイツでも日本でも伝統は違うが、人が生まれ育った土地の伝統文化を継承していこうとする気持ちは世界共通だと思う。しかし、その気持ちをさらに育てていくのは教育の力である。ただその土地で育ただけでは感性も磨かれない。学校教育のどの分野においても、それぞれがリンクし合い、たくさんの歴史や知識を学ぶことで豊かな感性を持った人間を育てていくことが最大の目的だ。美しいものや形の合理性などを感じ取り、思考してものづくりに発展させていく図工・美術教育は人間教育の中でも生活の中で一番身近であり、人が豊かな人生を過ごしていくためには、必要性の高い教育である。

日本の義務教育 9 年間は全日制で、図工・美術教育は中学 2,3 年生になると週 1 時間の年間 35 時間という極端に少ない時間数で学習指導要領の内容を網羅するよう要求されている。ゆとり教育になっても、大学入試制度は変わらない。厳しい受験戦争の中、芸術科目を中心とする技能教科は子どもたちにとって『息抜き』の教科になり、現場でも重視されていないことがよく見られる。義務教育の間に子どもたちに図工・美術を学んでもらいたいことがたくさんあるにもかかわらず、指導者の数も減らされている。私の生活している臼杵市においては市内で中学の美術教師が 2 人という状

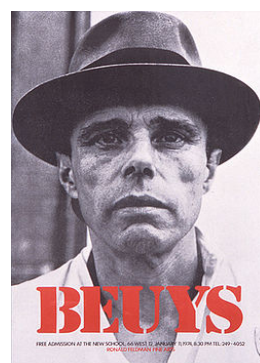
況である。(中学校は6校ある。)放課後は主に、通っている学校の運動系部活動に90%以上の子どもたちが所属している。土・日も練習や試合のため、自分の時間などほとんど楽しむことはない。一日のほとんどを学校で過ごす。スポーツが得意な子どもは其中で自分の才能を磨くことができるが、芸術、文化系に興味のある子どもは、少ない時間の間を縫うようにして、自分の才能を磨いていかなければならない。私の記述していることは日本の中でも地方の小さな町の状況であるが、これが東京、大阪などの都会でもスポーツにかかる時間が学習塾に変わるだけで、そう大きくは変わらない状況であろうと思う。それを証明しているのは新聞のスポーツ、文化欄の比較だ。新聞を読んでいるとどうしてもスポーツ欄の華やかさに目が行く人も多いだろう。地方紙ほどその傾向が大きい。学習指導要領においても保健体育の時間は現行より増加される。しかし、芸術の時間は変わらない。子どもたちの時間の使い方も、ゆとり教育の見直しでまた厳しくなるだろう。私は、スポーツを批判しているのではない。あまりにも、どちらも感性を育てる人間教育として必要な教育であるのに、偏りが大きすぎる。身近にすばらしい文化財があり、学ぶ環境も整っているのにそれを体験できない子どもたちがたくさん存在することも現実である。(*2,4)

ドイツの教育制度は州によって違いが大きい。日本は主に中学3年生時が進路決定の分かれ道であるが、ドイツでは基礎学校が終わる10歳で進路先を考え、観察指導段階の2年間で進路を決定する。一般的には義務教育(6歳から15歳まで)の間、半日制の学校がほとんどで、昼食も家庭で取る。午後はそれぞれが興味のある社会教育施設に通うという、教育制度が一般的である。日本よりも家庭でしっかり子どもたちの進路先を早くから話し合い、責任を持って決定していくという現状がある。また、移民も多く、学校格差がわかりやすい。義務教育の間、日本は学校で過ごす時間が長いので、進路相談も主に学校で行う。しかし、ドイツは家庭が責任を負っている現状が強く、日本よりも家庭環境の差で進路格差も大きいのではないかと感じる。しかし、日本との大きな違いは社会教育施設を自由に選択できるということであり、その施設も州や国の行政機関の援助を受け、運営している。子どもたちが自分の才能によって、様々な教育施設を選択できるところが素晴らしい。そして、その社会教育施設と学校との交流もあり、学校が生徒を社会教育施設に連れて行き、体験学習をさせることもある。芸術でも、スポーツでも身近な施設を利用して幅広い体験ができるところが魅力であろう。しかし、最近ドイツも様々な事情から、全日制を取り入れた学校も増えている。子どもたちの午後の時間の使い方や、社会教育制度の在り方が課題として浮き出てくるようになるのではないだろうか。

(*2,3)

*2 日本(白杵市)とドイツの中学生の生活時間(中学2年生)比較(『ゲテナー、よこそドイツ』在田ドイツ通訳新聞大橋制作より抜粋)

白杵市(白杵市立東中学校の場合)		ドイツ(州によって違いがある)			
		全日制		半日制	
7:55~8:35	朝自習・学活	7:55~8:40		7:55~8:40	
8:40~9:30	1時間目	1時間目	2時間目	1時間目	2時間目
9:40~10:30	2時間目	2時間目	3時間目	2時間目	3時間目
10:40~11:30	3時間目	3時間目	4時間目	3時間目	4時間目
11:40~12:30	4時間目	4時間目	5時間目	4時間目	5時間目
12:30~13:25	昼食・休憩	5時間目	6時間目	5時間目	6時間目
13:30~14:25	5時間目	6時間目	7時間目	*社会教育施設でスポーツ、文化の習い事を楽しむ。	
14:35~15:25	6時間目	7時間目	8時間目		
15:30~16:10	清掃・学活	8時間目	9時間目		
16:20~17:30 (冬時間)	部活動	9時間目	*日本の学校は家庭で行うはずの子どもとの交流時間を(学活や清掃部活動など)担っている。 *部活動の指導は専門でなくとも教師全員で対応しており、自分の研修の時間などない。 *ドイツの教師は放課後に自主研修を行っている。		
16:20~18:30 (夏時間)		*一週間に一度学活(ホームルーム)がある。 *水曜日は午前中で終了 *2時間続きの授業(体育、国語、数学、美術など一週間に6回ある。)			
17:45~(冬時間)	下校	*部活動について、休みは週半ばの水曜日など1日。土、日はテスト休み以外、休みなし。練習が練習試合、公式試合が予定されている。文化部(美術部、合唱、吹奏楽部は日曜日休み) *中学3年生の夏休みまでこの生活が続く。			
18:45~(夏時間)					



*1 ヨーゼフ・ボイス



*3 芸術学校風景



*4 日本の中学生授業風景

2. 現地指導者との交流と実践

「芸術とは、人生そのものであり、芸術を生み出すことは、人間を生きることである～岡本太郎」

同じドイツの言葉を移動中のバスの中で通訳者のハイケ・パチケ（葉池パチケ）さんから教えていただいた。私たちの身近にもこれと似た言葉はたくさん存在するが、図工・美術教育の指導者であればこの言葉は自らの実践にて体感しているであろうと思う。ドイツ研修でも多くの指導者の方にお会いした。ここで、感銘を受けた指導者の方を数名取り上げるが、皆さんに共通しているのは美術教育のみならず、芸術教育に対して大きな期待と夢を持ち、日々子どもたちや国家の教育のために邁進していることである。自分やその周囲の指導者と比較してみようと思うが、美術を通して、国は違っても教育に対する情熱は変わらないと感じる。

・ルッツ・リンケ氏～ドイツ連邦芸術教育家連盟（BDK）委員、ドイツ連邦青少年文化教育連合協会（BKJ）、アトリウム青少年芸術学校校長、ドイツ研修統括責任者

ドイツに到着した初日に出迎えてくれたドイツ団のリーダー。この日独青少年指導者セミナーの中心的な役割を實踐して来た方だと紹介された。初日の夕食会でベルリン市内の歩道にある『つまづきの石』の説明をしてくださり、平和と芸術の関係を通して、ご自分の思いを熱く語ってくださったことが印象的だった。また、次の日リンケ氏がリードしながら、ベルリン市内を貸し切りバスで精力的に案内して下さった。その場においても『ベルリンの壁』や『ソビエト兵士慰霊場』などドイツの歴史や文化の継承と平和への思いが伝わる説明だった。（*3,4）

その後、アトリウム青少年芸術学校においても校長として存在感を感じる行動が数多くあった。まず、教職員の誰よりも早く出勤し学校の鍵を開ける。そして、校内ではすれ違う教職員や子どもたちに細かく声をかけ、励ましたり、指導したり、ほめたり、時には心無い子どもの行動を厳しく叱責したりする姿も見受けられた。私はリンケ氏のリーダーとしての姿を目の当たりにして、2年前に退職をした自分の学校のM前校長を思い出していた。リンケ氏と共通するのは、まず教育ビジョンがはっきりしていること。M前校長が『後姿の教育』とよく私たちに話してくれた。親や教師は自分が取っている行動や実践が直接子どもたちに反映するものである。目標が決まったら、まず自分が自分に厳しく行動し、お手本を示すのが教育者としての役割でないかと思う。リンケ氏はすべての活動にアンテナを張り巡らし、精力的に行動して周りの人々に教育していた。その行動を見るだけで、ドイツにおける素晴らしい指導者ではないかと感じる。もちろん、私はM前校長を心から尊敬している。

リンケ氏はこれからのドイツの芸術教育の行く末がとても気になる様子であった。評価会のときに私たちには『ピンクのサングラスをかけてドイツの芸術教育現場を見てもらった』と言われた。きっと、想像以上に厳しい現実があるのだろう。しかし、これからのドイツの芸術教育のためさらに情熱をかけて教育活動に力を入れてもらいたいと思う。



*1 プログラムの説明 *2 学生の資料を説明 *3 ベルリンの壁記念館にて *4 みんなで記念写真

・ギゼラ・ブルダ女史～アトリウム青少年芸術学校副校長、ドイツ語、政治学、演劇学の先生、研修中のホストファミリー

私のホストファミリーであったギゼラ女史は主にドイツ語（国語）と演劇学の先生である。とても明るく、表現力豊かな心の温かい方だった。最初にアトリウムであった時には学校の演劇施設を案内してくれ、たくさんの衣装倉庫に行き、私たち一人ひとりに試着をさせてくれた。そして言葉がはっきりとは分からないが、たくさんの英語を交えてご自身の演劇に対する思いを話してくださった。言葉がうまく通じない私に対して、絶妙なタイミングでコミュニケーションを取りながら、このドイツにて私たちが学んで欲しいこともしっかりと伝えてくれた。

訪れたギゼラ女史の自宅では、日本で集めた扇子やポスターなどを紹介してくれた。特に広隆寺の弥勒菩薩が大好き

だということで、部屋の壁に大きなポスターが貼ってあった。そして、次の日はアトリウムとドイツ語を教えている学校に連れて行ってくださった。アトリウムでは、小学生の読み聞かせや絵本作家を招いてのワークショップ、ドライポイントの実習を見学。指導者の授業の工夫と子どもたちの発表や授業風景を見て、その表現力の豊かさに驚かされた。また、午後からはギゼラ女史の高校生ぐらいの生徒を対象としたドイツ語の授業を見学した。ギゼラ女史が精力的な質問を発するのは授業の最初だけで、後は生徒たちが手を挙げ、自分の考えたことをしっかりと発表する。このやり取りが終了時まで続き、授業後も生徒の質問に答えていた。『今日の目標は手を挙げて発表することです。』という目標を掲げなければ手を挙げて発表しない日本の中学生とは大きな違いだと感じた。（*1,2）

その後、月曜ということも忘れて『美術館に行きたい。』という私の要望に答えて、ドイツ・グッゲンハイム・ベルリンに連れて行ってくださった。展示作品の中にフランク・ステラの珍しい作品もあり貴重な体験だった。そして、ダウンタウンを案内され、街中の書店にて『是非見てもらいたいものがある。』とギゼラ女史に紹介された本は、ベルリンの壁が崩壊するまでの写真集だった。一つひとつの写真を丁寧に説明して下さった。そんなギゼラ女史を見ると、ひとりの教師としてドイツの歴史を真剣に伝えている姿が印象に残った。臼杵市では年間に4回ほど日にちを設定して、『平和授業』を行っている。世界唯一の核爆弾の被爆国として平和の大切さを改めて考える時間であり、子どもたちに伝えなくてはいけないことがたくさんある。ギゼラ女史のように、日常から今の平和に対して考える機会を持たなくてはならないと感じる。

2日間の短い滞在であったが、ギゼラ女史の温かい人柄と情熱的な指導者としての誇りを感じてとてもよい体験になった。細かい気遣いまでしてくださったギゼラ女史に厚く御礼を申し上げたい。



*1 読み聞かせ風景

*2 ドライポイント制作風景

*3 ギゼラ女史とツーショット

・ドールテ・ツィールケ女史～クラナッハ財団芸術学校校長・連邦青少年芸術学校・文化教育施設連盟 (bjke) 委員

研修プログラム半ばのヴィッテンベルクプログラムの主催者であり、2009年の訪日ドイツ団のメンバーであった。ヴィッテンベルクの素晴らしい文化財を、私たちにたくさん提供していただいた。まず、ヴィッテンベルク駅に到着し、商店街を徒歩でホテルに向かった。私たちの目に飛び込んだのは、街の美しさである。静かな風景の中に色とりどりの建物が並び、商店のウィンドーには、かわいらしいオブジェや衣服が展示されている。そして黄色い壁が、ドイツで見た初めての青空にぴったりであった、クラナッハの家。そこで、ドールテ女史やクラナッハ財団所長のエヴァ・ルーバー女史からルーカス・クラナッハや、クラナッハ財団についての説明を受けた。（*1）

クラナッハは同時代の宗教改革者マルティン・ルターと親交が深く彼の肖像画や聖書の挿絵など数多くの作品を残している。それまでの聖書は学識豊かな人でなければ読むことが難しく、庶民には遠い存在であったが、クラナッハが絵で表現することで、庶民にとって読みやすくなった。人々に大切なことを伝える役目を、絵で行ったのがクラナッハの芸術である。東ドイツの歴史の中ではクラナッハは尊敬されていなかった。これらの建物も1989年の東西統一まで荒れていた。その後、歴史的な建物を守りたいという意識が出てきた。そして、1989年11月7日にクラナッハの家を守りたいという祈りをささげ、署名や募金活動を行った。様々な東西の考え方の違いや所有の問題等を乗り越え、1991年に決議まで到達し、現在の二つの建物の購入まで至った。1200万ユーロの修理代は市やドイツ連邦から費用が出て修復できた。そして、10年ほど前からドールテ女史をはじめとして、クラナッハの家にて絵画教室を開いている。学校の絵画教室のためのプロジェクトもあり、年間たくさん子どもたちが参加している。

上記の説明を受けた私たちは、クラナッハ財団の方々の努力に深い感動を覚えた。東西ドイツの統一があり、このようなプロジェクトを進めるにはきっと血のにじむような苦勞が数多くあったのであろう。しかし、ついに国を動かす成功に導いたのは貴重な文化財を国の人々、子どもたちのために守ろうとする財団側のビジョンが全ドイツの人々の心をも動かしたのだ。

臼杵市にも国宝『臼杵石仏』（平安・鎌倉時代）が市内深田地区にある。素晴らしい文化財で今は観光客も多く、施設も充実しているが、1950年代までは崩壊破損が甚だしかった。田舎町の静かな片隅で町の人々からも大切には扱われていなかったのだろう。しかし戦後、学術研究が進み、改めて臼杵石仏の価値が見直されてきた。そして、1953年に修復工事が始まり、1993年8月25日には地面に落ちていた中尊大日如来の仏頭が復位、昔日の尊厳な姿に復旧された。1962年には国の重要文化財の指定を受けていたが、保存修復完了後の1995年6月15日磨崖仏では全国初の国宝に指定された。そんな歴史を抱えた誇るべき文化財が市内には存在するが、それを企画し、運営してきた人びとは言葉では言い表せない苦勞を抱えてきたことだろう。クラナッハの家保存活動時期と臼杵石仏保存修復の時期は偶然だが同時期である。貴重な文化財を守るため、世界の様々なところで、努力を重ねている人たちが存在してきたことに新たな感動を感じる。

ヴィッテンベルクプログラムではドールテ女史の案内の下、木版画のワークショップを体験し、『ルターの家』の展示見学とクラナッハ時代に行った肖像画の模写ワークショップの体験や芸術家のショップの見学など、ゆったりとした気持ちで芸術を味わうことができた。ドールテ女史は『訪日の時にたくさんの日本文化に触れ、おもてなしの心を感じたので、ぜひ、このヴィッテンベルクに皆さんを招待したかった。』と話していた。私たちが受けたヴィッテンベルクのおもてなしはとても温かく、何よりも芸術を心から愛する指導者たちの気持ちが伝わった2日間であった。（*2,3,4）



*1 クラナッハの家

*2 ルターの家とワークショップ風景

*3 ドールテ女史と記念撮影

*4 国宝臼杵石仏

(左・修復前 右・修復後)

・メフティル・アイコフ女史～連邦青少年芸術学校・文化教育施設連盟 (bjke) メンバー、ドイツ研修プログラムコーディネーター

研修の後半はドルトムントプログラムで、現地のメフティル・アイコフ女史が案内役を勤めてくれた。ドルトムントは最近日本でもサッカーの香川選手の活躍で、マスコミにもよく取り上げられている都市である。街はクリスマスマーケットで華やかに飾られ、活気があった。メフティル女史は明るく、誰に対しても気軽に声をかけてくださった。私たちが滞在するホテルは障害のある人と健康な人が同時に働く総合ホテルだった。言葉は通じにくい、一生懸命働いている従業員の姿が印象的だった。ホテルのコンセプトを丁寧にメフティル女史は説明してくれた。我が家も知的障害を持つ長男が老人福祉施設で働いているが、失敗をしながらも仕事を続けていくことは本人にとって、とてもよいリハビリになる。そして、健常者にとっても障害者との共生を感じる良い機会になると思う。このホテルを選択されたメフティル女史もきっとそんなことを考えて私たちに提供してくださったのではないかと想像した。

ドルトムント市はノルトライン＝ヴェストファーレン州の中にあり、工場のための大切な川、ルール川からルール地方と呼ばれている。工場地帯であったため、世界大戦で建物は破壊されたが戦後、発展を遂げた。私たちはメフティル女史の案内で一日目は、ドルトムント文化局にて子どもの文化教育を重点的に行っている説明を聞き、市内Uタワーの美術館を訪ね、展示見学をした。次の日はウンナ市を訪ね青少年芸術学校の施設を見学し、関係者との意見交換会を行った。三日目は、駅近くに聳え立つ世界遺産ケルン大聖堂の中に入り、リヒターのステンドグラスを見る。その後、ハンザ・ギムナジウムにて芸術プロジェクトの説明を聞き、13年生の授業を見学した。最後のプログラムの日にはヘルテン市を訪ねクリエイティブスタジオや文化能力証明書についての説明を受けた。午後よりエッセン市にある世界遺産ツォルフェライン炭鉱業遺跡群にて、ガイドを通して見学した。これらの充実したプログラムをすべてメフティル女史が計画し、私たちを案内してくれた。振り返ってみると地元を中心に周辺の素晴らしい施設や学校、そして文化教育活動を、普段から仕事を通して深く関わり合わなければ、私たちのような外国人にこれらの良さを伝えることはできないだろう。改めて、メフティル女史が日常、国の青少年のために様々な文化活動を学習し、交流しながら未来の美術教育の

発展を模索している姿がよく分かった。指導者は常に自分のテリトリーだけでなく、広い視野で教育ビジョンを持たなくてはならない。そんな気持ちをさらに強く持たせていただいたプログラムだと思う。(＊1,2)

白杵市や大分県でも先に記述したように文化財や施設も存在するが、ドイツのように社会教育施設や学校、芸術家と深く幅広い交流はない。意見交換会の中で『ドイツ人は連合を作るのが好き。』と話していたが、そのあたりの違いが大きいのかもしれない。誰にでも素敵な笑顔で語りかけてくれたメフティル女史の行動力から学ばなくてはならない。



＊1 ケルン大聖堂とゲルハルト・リヒターのステンドグラス

＊2 ツォルフエライン炭鉱遺跡群とツォルフエライン・スクール

3、これからの美術教育ネットワーク

「夢を現実にするのは人である～ウォルト・ディズニー」

ドイツ研修で2週間、様々な指導者や子どもたち地域の人のびとなどたくさんの人と交流してきた。私たちが紹介された美術教育は、ドイツ国内でも質の高い教育レベルにあるものばかりなのだろうと感じた。日本の美術教育は（特に中学校）、選択教科になるか必修教科にとどまるかの分かれ目に置かれ、何とか現在の必修教科の位置を保ってきた。しかし、1項で述べたように時間数や現場に置かれている指導者の立場から、決して必修教科として油断できない状況にある。義務教育の現場の学校では日本の状況ほどではないにしてもドイツも似たような様子であることを各地域の指導者からの話で分かった。特に全日制をすすめていく時に、必ず芸術教科の時間数や社会に与える影響などについて議論になるだろう。そこで、子どもたちのこれからの人生を考えた長いスパンでの教育的な価値を考え、前向きに学校教育を考えていければよいが、現在の日本のように、数字の上での学力観や、目に見えて答えの出せる教育的な価値だけを中心に議論されると、芸術科目の中でも美術教育はその存在さえ危うくなっていく。

日本でもドイツでも、そして世界のどこでも、人が豊かな生活を営むためには芸術は必須である。現在残されている重要文化財、国宝、世界遺産を見ても芸術教育の必要性は理解できる。その基本的な知識や技術を習得する図工・美術教育は子どもたちが幼い時から計画的に進められていかなければならない。広い視野で考えると、国がすばらしい芸術家や芸術教育の指導者、それを将来支えていく優秀な青少年を、どれぐらいの人口割合で育てていくかということが国家を支え、繁栄させていく大きな要因になるのではないかと。

私は以上のことからこれからの美術教育を支え、発展させていくのは『地域』『指導者』そしてそれらをつなぐ『ネットワーク』であると思う。『三人寄れば文殊の知恵』という言葉があるが、一人で考えることには限界がある。しかし、複数になれば意外な視点から答えが見つかることが多い。そこで、日本における美術教育のネットワークとドイツのネットワークそして未来の美術教育ネットワークについて比較しながら考察してみる。

・日本の美術教育ネットワーク（白杵市永松の場合から）

私は大分県で新採用になって以来、最初の学校では自分を含め美術教師は3人いたが、それから美術教師は徐々に削減され、どの学校に異動しても全校200～250人ぐらいであれば1人であった。そして、正採用の教職員は市内からさらに減り、6～7校中学校があるのだが、臨時講師を入れて美術教師が存在する学校は4校が最大だった。さらに3年前より、臨時講師の枠も剥がれ、(定員枠には美術ではなく英語や数学の臨時講師に変えた学校が2校出た。) ついに、現在の市内中学校が6校ある内、美術教師がいる学校は2校になってしまった。市内の教育研究会でも話し合いは班長の教頭を含め3人である。外部から見ると美術教師のネットワークどころではない現状であろう。

そんな厳しい状況であるが、出産と育児休業も落ち着き、現場に戻った10年ほど前から、真剣に美術教育の広がりについて考え、ネットワーク作りを夢見て、まずは地域の美術関係者の協力を求めた。はじめは、OBである元中学校美術教師で、油絵作家活動をしているS先生であった。白杵市では、地域の文化財を味わうことを目的とした『スケッ

チ大会』を市内全中学校や小学校が取り組んでいる。私の学校は『地域の作家と語ろう！』というテーマでS先生に中学校に来校していただき、自分の作家としての取り組みなどを紹介して、子どもたちがスケッチ大会で作品を描くポイントなどを直接指導していただいた。結果はとても好評で、その後のスケッチ大会でも子どもたちが意欲的に取り組む姿が見られた。

その後、大分大学大学院にて隣の佐伯市の廃校を利用した『廃校美術館』を企画運営し、大学生や教授、佐伯の地域の人びとと交流した。その時のつながりがその後の、現場に戻って行った中学3年生対象の『現代アートで楽しもう！』というワークショップの取組である。『現代アートで楽しもう！』は3年学年美術でクラスを解いて行われる。大分県の大学生や地元の芸術家、他校の美術教師など10名ほどのゲストティーチャーに来校してもらい、それぞれのワークショップを紹介。子どもたちは好きなワークショップを選択し、後日ゲストティーチャーとともにワークショップを一緒にいき、作品を制作する。それを発表しながら全員で交流する授業である。子どもたちにとっては平均年齢20代の若いゲストティーチャーは魅力で、制作も様々な視点からできるので毎年、対象学年は楽しみにしてくれている。また、学生作家や芸術家、教師にとっても良い刺激になる。その他、最近では鑑賞教育の推進から県内の美術館との連携も深まってきた。何度も、大分県立芸術会館の出前授業を受け、芸術会館にて鑑賞授業も行っている。

そんな実践を地域で重ね、少しずつであるが市内だけでなく県内でネットワークが広がってきた。3年前から、私の行ったワークショップ形式に沿って夏休みに『中学生芸術講座』を中学校文化連盟主催で開催。県内100名近くの子どもたちが参加した。来年、再来年と参加者は増加していく見込みだ。また、大分県教育委員会が芸術教育連携推進事業を立ち上げ、その中で美術教育は『美術鑑賞授業力向上事業』を今年度から設け、その実践研究会議の研究委員として県下の大学教授、小・中・高図工・美術教師、義務教育課指導主事、美術館学芸委員など15名が構成された。私も研究委員のメンバーとして実践授業を行い、他の研究委員授業実践研究にも参加している。

ネットワークの歩みは遅いが確実に10年前より広がっている。来年度(2011年度)には大分県造形教育研究会の臼杵・津久見市大会を控え、臼杵市を中心に行う予定である。その事務局が私の学校であり、事務局長としてネットワーク作りをさらに深めたいと考えている。(※1)

***1 10年間に見る臼杵市美術教育ネットワークの流れ**

2001年	スケッチ大会にて地元芸術家のS先生来校(油絵作家)、授業	臼杵市内
2002年	スケッチ大会にて地元芸術家のT先生来校(日本水彩連盟会員)、授業	ネットワーク
2003年	大分大学大学院にて佐伯市旧本匠東中学校にて『廃校美術館』を企画運営	大分県ネットワーク
2004年	スケッチ大会にて地元芸術家のS先生来校(油絵作家)、授業 『現代アートで楽しもう！』3年生学年美術地元芸術家とのワークショップ授業	臼杵市・大分県 ネットワーク
2005年	スケッチ大会にて地元芸術家のI先生来校(自由美術協会会員)、授業 『アートワンダーランド』1年生学年美術地元芸術家とのワークショップ授業	*2006~2007年度には大分県教育委員会指定事業『感性きらめく芸術教育推進事業』を臼杵市が受け、事務局として企画・運営
2006年	スケッチ大会にて地元芸術家のG先生来校(朝倉文男記念館館長)、授業 『現代アートで楽しもう！』3年生学年美術地元芸術家とのワークショップ授業	
2007年	スケッチ大会にて地元芸術家のS先生来校(油絵作家)、授業 『現代アートで楽しもう！』3年生学年美術地元芸術家とのワークショップ授業 大分県立芸術会館提携1年生対象授業『首藤コレクションワークショップ』	
2008年	スケッチ大会にて地元芸術家のS先生来校(東光会会員)、授業 大分県立芸術会館出前3年生対象授業『日名子実三展彫刻ワークショップ』 『中学生芸術講座』企画・運営・参加 『InSEA 国際美術教育学会世界大会2008』に参加	世界?・臼杵市・大分県 ネットワーク
2009年	スケッチ大会にて地元芸術家のI先生来校(自由美術協会会員)、授業 『現代アートで楽しもう！』3年生学年美術地元芸術家とのワークショップ授業 『美術館を活用した鑑賞教育充実のための指導者研修』参加 『中学生芸術講座』企画・運営・参加 大分県造形教育研究会臼津大会事務局立ち上げ	全国・臼杵市・大分県 ネットワーク
2010年	スケッチ大会にて地元芸術家のY先生来校(東光会会員)、授業 『中学生芸術講座』企画・運営・参加 『現代アートで楽しもう！』3年生学年美術地元芸術家とのワークショップ授業 『美術鑑賞授業力向上事業』実践研究員として1年生対象に鑑賞授業 『平成22年度日独青少年指導者セミナー』参加	ドイツ・臼杵市・大分県 ネットワーク

・ドイツの美術教育ネットワーク

研修で紹介していただいた学校は、ほとんどが社会教育施設にあたる青少年芸術学校であり、先に記述したようにドイツの学校は午前中で終わるため、午後の時間を自分の興味関心と合わせて、各種学校に通うことができる。例えば、スポーツ関係の学校にしても幼い頃から、自分に合った指導者が選択でき、成長に合わせてプログラムを組み、技術を伸ばしていける良さがある。

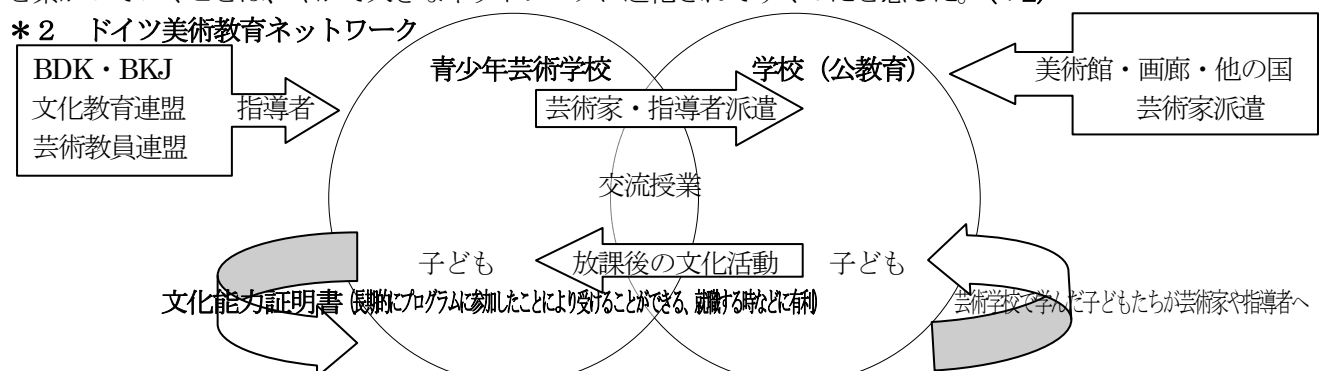
ベルリンではハンナ・ヘーヒ小学校とアトリウム青少年芸術学校の交流授業、ヴィッテンベルクではクラナッハ財団芸術学校の芸術家と子どもたちのワークショップでの交流とルターの家での青少年教育事業、ドルトムント市における壮大な文化教育コンセプト、ウンナ市において、ウンナ青少年芸術学校の説明を通しての意見交換会、face to face プロジェクト（ルール地方の芸術学校 8 校の共同プロジェクト）の紹介、ケルンハンザ・ギムナジウムの芸術プロジェクトの紹介、そして、ヘルテン市民会館での施設利用説明。充実したプログラムの中で感じたのはハンナ・ヘーヒ小学校やケルンハンザ・ギムナジウムなど特殊なプログラムで美術教育を行っている学校は別として、義務教育の学校の美術教育と芸術学校の美術教育にはかなりの違いがありそうなことだ。

特に印象的であったのは、ウンナ市の青少年芸術学校にて、ペーター・カンブ氏（BKJ 連邦青少年文化教育連合協会副代表・bjke 連邦青少年芸術学校・文化教育施設連盟代表）が私たちの質問に答える中で、子どもたちに質が高く、幅広い美術教育を提供しているが、『学校の一部にはなりたくない。』と話していたことである。この芸術学校は 40 年前からドイツにおける最初の芸術学校で、始まりが公教育の芸術の授業は不十分だったので、創立したという経過がある。公教育が提供する美術教育は幅広い活動がなく、面白くない。全ドイツで 400 校の芸術学校が創立されているが、このノルトライン＝ヴェストファーレン州は芸術学校の創立コンセプトがしっかりしているらしい。特に芸術家もこの芸術学校にて、1 年間 4 回の研修を経て、6,500 校の学校に年間 1,500 人～2,000 人が派遣されている。（芸術家のもらえるサラリーは 1 年間で 2,000 ユーロ、日本円で約 20 万円程。とても生活はできないので、違う仕事も持ちながら派遣されている）また、芸術家と現場の教職員のコミュニケーションも困難なケースが少なくないらしい。芸術家が授業を行うことで、自分の授業のコンセプトがぼけてしまうことに抵抗を感じる教師の例も出た。ペーター・カンブ氏が『学校に入るとつまらなくなる。』と一言、話していた言葉に公教育との壁を感じた。

逆の意味で美術教育の広がりや可能性を感じたのは、ケルンハンザ・ギムナジウムの芸術プロジェクトである。この学校では、『自分のことを表現する』というテーマの下、芸術家と生徒のプロジェクトを展開していた。特徴的であったのは、招待する芸術家はドイツ国内にとどまらず、中国、キューバ、南アフリカ他、学校教育に興味があり、前向きな芸術家を招待している。そして芸術家とのコンタクトは子どもたちに当番を決め、担当教師を付けて時間をかけて打ち合わせを行う。プロジェクトの実行後は担当教師や子どもとの関係は密接になり、地域や同僚からも好評を得ている。特に、芸術・美術を目指した他の国の子どもたちが、この学校を希望してくるようになった。まさに、周辺地域や国を超えたネットワークの実現例である。私は招待される芸術家がどんなルートで来るのか質問してみた。すると、説明していたラインデル女史（学校ユネスコ委員会委員長）は子どもたちや教師でスポンサーを探していたが、ある財団がスポンサーに付き、費用がたくさん出たらしい。その費用で行えたが、芸術家については、画廊やキュレーターを通して招待してもらうケースや、ラインデル女史本人のネットワークを利用して招待しているとのことだった。子どもたちはプロジェクト終了後、芸術大学に進学し、映画作りを目指す子どももいる。

たくさんの学校の芸術家とのプロジェクトや芸術学校と公教育学校との交流を紹介していただいたが、どんなケースもその学校だけにとどまらず、必ずネットワークを広げようと、日夜努力している指導者たちの姿がうかがえる。公教育との壁はあっても芸術家を派遣しているプロジェクトは年々増えている。そして、美術教育を推進していくために、芸術学校は質の高いプログラムを工夫し、子どもたちに提供している。意見交換会の中で『ドイツ人は連合が好き』と話していた。この研修も、美術教育に対して、しっかりとした思想を持っている人びとがいてこそ、実現できている。1 人で奮闘するよりチームとしての力は強い。ハンザプログラムの例を見ても、身近な環境から志を同じくする人びとと繋がっていくことは、やがて大きなネットワークに進化されてゆくのだと感じた。（*2）

*2 ドイツ美術教育ネットワーク



・日本とドイツの美術教育ネットワーク比較と課題

ドイツの美術教育ネットワークは先の図を見てもわかるように、指導者が組織的に繋がりながら美術教育を推進している。特に文化活動に関しては主権が16の州にゆだねられており、ほとんどの文化施設を州と自治体が運営している。そのため、全国各地に文化の中心地が誕生しており、ノルトライン＝ヴェストファーレン州に属するルール地方は文化的地域に変貌し、数々のプロジェクトを推進していることでクリエイティブな存在感を証明している。比較的小さな町においても国際レベルに相当する文化事業が提供されている。美術教育もその1つとして青少年芸術学校などにおいて、あらゆる指導方法の工夫が展開されている。そして、その成果を学校との交流授業で発揮させている。公教育現場の指導者との軋轢なども報告されたが、これだけのネットワークが展開されれば、志の高い指導者であれば大きく影響を受け、さらにネットワークを広げようとする人々が、これからも繋がっていけないのではないだろうか。

日本の場合は、隣の県で行われている事でさえ、遠く感じる。極端に言えば、同じ県下でも交流が少ない。そして、財政難は小さな県ほど深刻で、文化施設も乏しい。身近に素晴らしい文化財が存在しても、子どもの時に、1日の大半を過ごす学校教育で学習しなければ一生、文化と縁がないという人も存在するのではないか。時々、インターネットの美術教育で検索し様々な県のホームページを見ても、教育委員会や県庁などのページで、美術教育が大々的に紹介されていることは皆無である。そして、これからの美術教育を真剣に考え、実践を重ねてきているのは、志の高い情熱ある指導者ばかりである。せつかくの実践もその指導者がいなくなれば同時に消えてしまう。ドイツに比べ、日本の美術教育の指導者は孤独に悩まされている人が多い。私もその一人で、何とかネットワーク作りのヒントを求め、様々な研修会に参加して模索している。昔から日本は、世界の事情を学習しながら、政治や文化を変革してきた。今の時代も子どもたちの教育にとって何が大切なのかを振り返り、世界と芸術文化においても交流を深めながら国内のネットワークを広げる工夫が必須である。この度、日独青少年指導者セミナーに参加したこの経験も貴重であり、現場や子どもたち、地域に還元していくことがネットワーク作りの第一歩である。改めて自分の心の中で、大きな課題を感じている。

おわりに

「芸術とは、自然が人間に映ったものです。大事なことは、鏡をみがくことです～オーギュスト・ロダン」

はじめてのヨーロッパ、しかも憧れていた文化の国ドイツ。夢心地と大きな期待と不安も抱えながら現地で目にした素晴らしい美術教育は私の一生の宝物となった。まさに『百聞は一見にしかず』であり、美術教育に対するドイツの指導者の方々の実践力や深い情熱に触れ、大きな刺激を心に受けた。報告書ではドイツの美術教育ネットワークに比べ、日本の課題の多さを大きく取り上げたが、ドイツの文化に触れたことで、日本の文化や地元の魅力の再発見もできた。この研修を元にさらに、地元臼杵市でアンテナを張り巡らし、未来を担う子どもたちに美術教育の必要性を伝えていきたい。

最後に、プログラム全体をリーダーとして統括なさっていた懐の広いルッツ・リンケ氏、ホストファミリーで細やかな心配りをしてくださったギゼラ・ブルダ女史、ヴィッテンベルクの素晴らしい文化を案内してくださったドルテ・ツィールケ女史、ドルトムントプログラムで明るく丁寧にプロジェクトを紹介してくださったメフティル・アイコフ女史、学生でありながら、しっかりとして学習能力も高かったツイツイ・ローランド女史（最後は日本語もだいぶ理解しており、すごい！の一言）、そして、全行程を同行し、心のこもった的確な通訳で私たちを精神的にも大きく支えてくださったハイケ（葉池）・パチケ女史。その他ドイツでお世話になったたくさんの方々、明るく元気をいただいた日本団の皆様心から厚く御礼申し上げます。



Auf Wiedersehen!
Wunder Bar
Generation !!